「日々の理科」（第 2986 号） 2022,10,10

「十三夜の月（１）」

お茶の水女子大学附属小学校教諭

お茶の水女子大学サイエンス＆エデュケーション研究所 研究員

田中　千尋　Chihiro Tanaka

「月見」といえば、９月の「十五夜」が有名だ。「十五夜」とは「旧暦の１５日～１６日にかけての夜」をさし、本来は特に秋の月見の日だけをさす語ではなかった。しかし旧暦がほとんど使われなくなった現在では、「十五夜」と言えば、「９月の十五夜」つまり、旧暦の８月１５日～１６日の夜のみを指す語になっている。しかし、月齢（新月からの実日数）と、月相（実際の月の形状）は必ずしも一致しないので、「十五夜の晩に満月が見られる」とは限らない。これは、月の公転角速度が一定ではないことが主な原因で、実際に「満月の月齢」は 13.8～15.8 と２日間もの幅がある。

写真は今年９月１０日の十五夜の日の月である。

この日の月は月齢 14.2 だったが、月相（月の形状を 0～28 で表現した数値）は 14 で、輝面比も 100%と完全な満月だった。ただ、十五夜の晩が満月でなくとも「ほぼ満月」に見えるものである。

１０月８日は「十三夜」だった。十三夜も、本来は「旧暦の１３日～１４日の夜」をさし、秋の月夜だけを表現する語ではなかった。現在では１０月の月夜（旧暦９月１３日～１４日の夜）のみを指す。十三夜の月は、月齢が１２~１４の月になることが多く、満月になることはない。十三夜の月は「満月直前の左側がやや欠けた月」となる。そんな「中途半端な月」を愛でる習慣がなぜ定着したのか謎だが、どうもこの風習は日本独特のものらしい。江戸時代には、十五夜と十三夜の両方を見るのが縁起が良いとされたようだ。

十三夜の晩、私は北軽井沢で月を見ていた。秋空にぽっかりと浮かぶ、満月前の月を期待していたのだが、この日は薄曇りで、月は雲の向こう側にぼんやりと見えていた。

しかし、自然は裏切らない。その雲が「大気光学現象」を見せてくれていた。月に高積雲（ひつじ雲）がかかると、月の周囲に色のついた環が形成されることがある。これは太陽に高積雲がかかっても見られる。太陽の場合を「日光環」、月の場合を「月光環」というが、月の場合は半月～満月でしか見られない。